

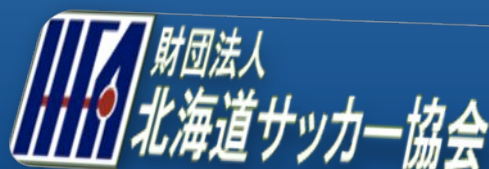
2011北海道トレセン女子 U-15第Ⅱ期

2011年8月27日～29日

【報告者】 春名 健司

トレーニング：東雁来サッカー場、SSAP

宿泊：札幌サンプラザ



なでしこは遠い未来か、
それとも近い将来か。



1. 概要

今回は年4回予定されている北海道トレセン女子U-15の第2回目になる。第1期は5ブロックから合計61名の選手を集めてゲーム中心であったのに対し、今回は選手を各ブロックから選手を絞り込み、45名(当日4名の欠席)でトレーニングとゲームを行った。今回は初めての試みで、北海道トレセンU-13・14(男子)と同時開催の日程だった。前日の実技や初日午前の実践に参加させていただいたり、U-13とのゲームを実施したりすることができた。本トレセンと第1期参加選手から、第3期に召集する選手およそ30名を選考することとなる。



2. 参加人数

今回の参加選手は各ブロックからの推薦選手41名(欠席者除く)。うち、GK選手が6名、FPが35名であった。数年前までは学年別の召集人数に差がなかったが、今回は中学3年の選手が半数を占めた。所属チームや各ブロックでのトレーニングの積み上げの成果と見ることができる。一方で、ブロック間での選手数には開きが出てきつつある。女子カテゴリでは普及活動も重要である。各地区の女子委員会との協力体制を整え、女子選手増加に取り組むことも急務と言える。道南ブロックは今年度より男子と同じ地区割りとなったが、指導者が連携し、初年度より好スタートを切ることができている。

スタッフは日程に月曜日が入っているため手薄になってしまったが、JFAより3名のNTC、札幌スポーツクリニックより3名のトレーナー、ブロックより3名のスタッフが関わってくださり、なんとか運営することができた。HFAスタッフ2名を中心に運営したが、苦しい状況だった。

北海道での一貫指導をブロックトレセンから！！
日本代表とオリンピック代表を2015年までに輩出する！！
和歌山国体(2015)までには優勝を！！



(表1) ブロック別人数と学年内訳

ブロック	人数	中1	中2	中3	備考
札幌	15	0	5	10	1名欠席
道央	6	2	2	2	1名欠席
道東	14	4	4	6	3名欠席
道南	8	0	3	5	
道北	3	1	2	0	
合計	45	7	16	23	

3. トレーニングメニュー

【守備】

27日午後は守備のトレーニングに取り組んだ。W-up ではボールに対して正対することを意識させたドッジング、1対1、2対2を行う。Tr. 1では3対3ラインゴールに取り組んだグループと、5対5+GKに取り組んだグループがあった。後半1時間を男子U-13とのゲームを組んでいたため、Tr. 2を実施せずゲーム(ハーフコート9対9)を行う。この日の積み残しが多いと判断し、28日午前も再度、同内容で守備のテーマでトレーニング、ゲームを行った。

【攻撃】

28日の午後は、攻撃「ゴールを意識した組み立て」をテーマにトレーニングを行う。W-up では菱形のパス&コントロールのドリル、Tr. 1では3対3+2ターゲットを行う。後半1時間をゲームに当てていたため、Tr. 2を行わずゲーム(9対9)を実施。

【ゲーム】

29日午前は3チームによる総当たりのゲーム(9対9)を実施した。

4. 成果と課題

(1) 個で奪い、グループで奪う

全体的に相手のミスから奪えるのを待っているような印象を受けた。現状ではアプローチには行っているものの、相手に制限を与えるまでに至らなかったり、相手がプレッシャーを感じることもなかったりするケースが多くあった。また、抜かれたあとに必死に追う姿や相手を追い込むために効果的にチェイシングを行う姿も乏しかった。よって、まずアプローチの距離を伸ばし、相手に制限を与えられるポイントまでプレスをかけるよう要求した。その際、しっかりとボールに正対させ、パスコースやシュートコースをしっかりと消すことを意識させた。その上で、ボールを奪うチャンスを逃さないようにするとともに、抜かれそうになった時に身体を寄せて対応すること、抜かれても最後まで追うことなどを意識させた。

2対2以降では、2ndDFの1stDFに対する関わり方と正しいポジショニングの2点が課題と感じた。ボールウォッチャーになってしまい、1stDFが追い込んで奪う準備ができていないケースが多々あった。よって、1stDFへのコーチングで相手に制限を加えていくと同時に、1stDFのプレスのかけ方で自分のポジショニングを修正したり、狙いどころを予測したりするよう求めた。2対2では2ndDFが誰か明確なのである程度はできるようになったが、人数が増えると2ndDFの意識が薄れ正しいポジショニングからずれてしまうことが多かった。

育成年代では、自ら奪いにいき、組織として奪いにいく姿勢が大切である。ねばり強く追う選手やスライディングでブロックする選手などもいて、3日間を通して徐々に成果は見られていたが、1stDFとして個でできることを最大限に取り組み、同時にグループ(組織)としてボールを奪うために2ndDFがやるべきことをしっかりとやる習慣を身につけていく必要がある。



(2)個でゴールを目指し、グループでゴールを目指す

ゴールへの意識が弱い。よってゴールを見ることも少なく、相手にとっては守りやすい攻撃となりがちだった。具体的には、アタッキングエリアでもパスが第一になっている傾向や、ボール保持者からパスを受けてシュートを打つ関わりやボール保持者の選択肢を増やす関わりがとも少ない傾向が見られた。

よってまず、プレーの原則に立ち返り、ゴール(ターゲット)を意識することから要求した。観ておくこと、プレー中にも観ること、身体の向きなどにフォーカスし、積極的にゴールを目指す姿勢を求めた。当然、守備もこれに対応するので、今度は変化を観たり考えたりしながらプレーすることや相手との駆け引き、動き出しやパスのタイミングを合わせることを伝え、ボールを失わずにゴールへ迫ることを狙った。個では局面の打開を図ろうとする選手が増えていったが、一方で、周りの関わりが少なく、ボールの動きが乏しいという課題も浮き彫りとなった。サポートの位置が悪いのに修正しない、ギャップの共有がなくターゲットの動き出しがない、後ろのサポートが遠い、オーバーラップやクロスオーバーなどによる攻撃参加が少ないなど、課題は大きい。足下の技術が高く、落ち着いて相手と駆け引きができる選手も少なくない一方で、周りのサポートがなくて選択肢も広がらず、攻



撃のスピードが落ちてしまう場面が多い。少ない人数のトレーニングで落ち着いて状況判断をしながらプレーすることやサポートの質(ポジショニング)を高め、人数が増えるに従って、グループとしてゴールを目指す関わりをより一層求めていく指導が必要だと感じた。

5. おわりに

今回は北海道トレセンU-13・14(男子)と同時開催であったことから、スタッフ自身が多くの課題に気付かされるトレセンとなった。前日の実技、初日午前の実践に参加させていただき、サッカーに対する理解や指導に関する技術を深められたことはこの上ない経験となった。男子に見られるスタッフの準備、指導の質、連携など、女子カテゴリーが学ばなければならない点が多くあった。また、多くの面でナショナルトレセンコーチの支えによって事業が成り立っているが実態があり、地域スタッフの主体性にも大きな課題が見られた。トレーニング内容でもゲームありきの日程となってしまう、積み上げのないままゲームを実施することとなってしまう。ゲームからの逆算でトレーニングを構築し、トレーニングとゲームの整合性を図れるようにしていく必要がある。

育成部長の上田氏から助言をいただくことができ、「仕組み」「ゲーム環境」「指導者の質」という育成年代の強化に必要な3つの視点を示していただいた。今後の事業運営に関わる大事な転機とすべく、この3つの視点から改めて運営を見直していく必要がある。なでしこJAPANの活躍が育成年代の選手にとって遠い世界の出来事のように感じさせてはならない。自分たちも頑張れば世界の頂点に立てるという気持ちを芽生えさせるような意義あるトレセンを目指すし、責任の大きさを自覚し、危機感をもって改革に取り組んでいきたい。

